

「三小節——四小節」二人向き合ひ、兩手を兩股にのせて、元氣よく四股を踏む。

「五小節——八小節」兩方組み合つて、押し合ふ。

「九小節——十小節」兩手をつなぎ、スキップで廻る。

「十一小節——十二小節」又向き合つて押し合ひをする隊形になり、始めの四呼間前進、次の四呼間後退で、交互に前進後退する。

「十三小節——十四小節」最初の様に、二組に分れて、元の位置へ戻る。

観 察

清 水 光 子

家具調度 寒い日が多くなるとどうしてもおへや遊びが多くなる。寒さに負けずに出来るだけ戸外へ連れ出すやうにするのだけだ。しかし一方落付いた室内遊びを樂しむにはまことにいゝ頃であり、又今まで氣のつかなかつたおへやのものにしつとりとした親しみをもつ機會で、そういうたものを殊更觀察らしくなく取扱つてみたいと思ふ。例へば銘々たんす(幼児のもの)、戸棚、机、椅子、衝立、ピアノ、オルガン等、そしてこれを通して銘々の家にある家具のことを話したりなどする。自由畫におへやの中をかいてみるのもよいし、製作としてあき箱におへやをつくつて遊ぶのもよい、子ども達の抽斗と先生の抽斗とのちがひをみたり(形や大きさ、ひき手など)机や椅子の高さを較べてみたりするの

も面白い。もつと段々みてゆくなら種々な手近で面白い觀察が出来るし同時に机の上にのらないとか椅子の取扱ひ方抽斗の整理整頓などの訓練をする事も出来るであらう。

こよみや額なども室にあるもの、一つとしてみてゆく。日めくりのこよみなら毎日めくるとお歸りの時なり朝なりきめてすることの一つにしてもよい。この頃は少しづつ字への興味が盛になる頃であるから簡単なこよみを合同で繪を入れたりして作るのも年の始めの仕事として面白い。曜日の順ももう判つてもよい頃ではないだらうか。この他に室のものとして時計とか寒暖計とか何かの表のやうなものも機會を捉へて教へるといふ風でなく一しよにみるといふやうにしてみせるやうにし度い。

店のいろ／＼誘導保育で紙箱の家をこしらへるについてなされる觀察である。この頃のやうに物資が配給制度になると大分店の形がちがつて来たし、様子もちがつて来た。いつも時と處に即應して、出来れば銘々のこしらへる家をみに行つたりし度いものである。保母の方がかへつて知らずにあるやうなこともある位に子ども達はみてゐる。店を作り乍らぜんなものを買つてゐて、ぜんな風になつてゐるか話し合ひ、わからない處は「よくみて來ませうね」と言つてたしかめる。店のいろ／＼などいふ繪本は參考としてならみるのもよいであらう。なるべく子供達のみるやうな子ども達の町の、村の、お店を對象にし度い。

寒 一年中で一番今が寒い時だといふことを知らせ、話す機會は多い此頃である。朝お庭中まつ白な霜、土のやはらかかつた所

に立つ霜柱に長いのは五種も七種もある、防火用水に池にはりつめた厚い氷、子ども達はつめたいよりも面白さで、お菓子やこつこがはじまつたりする。暖い地方でも、はくいきが白い煙のやうになる日はあるだらう。子ども達にとつてはつめたい水もつ

ららも霜柱もいゝおそび材料であり、いゝ觀察材料であるのだからただ禁止するばかりでなくて、注意して遊ばせ乍ら指導し度いものである。いつか口の少しせばまつたために氷がはつた。上のところがそつくり外れたのでその形のまゝ出さうとして子どもも同志大へん苦心した。その大ぜいのさわぎを倉橋先生が御らんになつて、加勢して下さつてうまくとり出して大喜びの歡聲を上げたことがあつた、又その氷の表面がでこぼこなのが問題になり、どうしてかといろ／＼考へたらしかつたが結局疑問であり、私も亦解決は興へなかつた。その氷を水のしたゝる蛇口に置いたら穴があいて大變面白かつたことであつた。大寒でも何でも子どもは風の子で元氣なので暖いのであるからこんな寒くてもこんなに元氣だといふ喜びを子ども乍らに感じさせるやうに遊ばせ度いものだと思ふ。

談話

安村ふさ

「二重橋のお話」 大東亞戦下に再度迎へる新年。上御一人の大稜威の下、勇士の方々の奮戦により、かくも赫々たる戦勝の中に

迎へられる新年。然も昨年のそれよりは大東亞建設の響き高きこの年——心は愈々おほらかに朗けく、愈々つゝましく引しまるのを覺える。

大君まします都に住む者にとつて、新年のはじめに謹み行ふ事は二重橋前に於ける宮城の遙拜である。爽々しい新年の朝早く、瑞雲たなびく大内山の前に、新しい年のよき祈言を申上げて寶祚の無窮を祈りまつる時、私達は日本人とこの聖代に生れた喜びを、ありがたさをひし／＼と感ずる。此の敬虔なる感激、それは上代から私達祖先の血の中に脈々として傳つて來たものである。私達はこの敬虔なる感激を幼兒等に傳承しなければならぬ。私達はあの御前にぬかづいた時の敬虔な感激を、敬虔な態度、言葉で幼兒等に語らう。幼兒等は私達日本人たるのありがたさを、喜びを其の中から感得してくれる事であらう。都に住む幼兒等は必ずや二重橋の御前にその父母達と共にぬかづいたものであらうから。

扱地方に於ける幼兒等の場合はどうであらうか、彼等は新聞等に謹載してある御寫眞で腰く拜する機会があるのであるが、或ひは幼い故に淡く心に留つてゐるものもあらう。で、此の新年に當つて特に、大君まします宮居であること、この御前に明らげき心でぬかづく事が日本人として最高の喜びである事を感じしめたいと思ふ。それには童話にでも仕組んで話すのも一方法かと思はれる。例へば、こどもが両親と遙拜に赴く事を骨子とし、語りたいたいことを、親子の對話にでもして言葉に注意しつゝ盛りたいたいと思ふ。

尙「國旗」についてであるが、之は四月のはじめに話した事であ